

ジャガイモと映画 (32)

<利活用 (3)>

Web ジャガイモ博物館館長 あさ ま かず お
浅間 和夫

108. クレマスター3

(原題: CREMASTER 3)

2002年、アメリカ映画。監督:マシュー・バーニー。

【キネマ旬報データベース】によると、「クレマスター・サイクル」とは、5本のフィルム作品とそれに関する彫刻、写真、素描などからなる超大作である。クレマスターとは睾丸を上下させる筋肉のことであり、母体内で胎児の性別が決まる時にも昇降する。転じて、上下運動と存在の曖昧さを描くシリーズのタイトルとしている。フィルムは1話完結だが、ゆるやかに全作がつながり、循環するようにしている。どれもセリフがほとんどないまま、映像と音楽で展開し、意味深な物語と奇妙な登場人物、鮮烈なファッションが印象的である。

『クレマスター3』は、アイルランドとスコットランドの巨人神話から始まり、ニューヨークでもっとも有名な二つの建築を舞台にめまいがしそうな物語が展開する。ひとつはニューヨークで一番美しい尖塔をもつクライスラービル。もうひとつは、フランク・ロイド・ライト設計のグッゲンハイム美術館。巨人やゾンビ、フリーメイソンが登場し、ケルト神話やミステリー、アクション、ミュージカルの要素が複雑に絡み合うものである。この映画は182分と

長いものであり、セリフらしきものは少なく、おまけに字幕もない。しかしジャガイモ好きには忘れられないシーンがある。それはこうだ。

冒頭、バーカウンターの隣の部屋に美女がいる。彼女は床を埋め尽くす皮つきのジャガイモを相手に刃のある型抜き専用の器を左右のブーツにつけて削っている(写真)。見たところチーズおろし器のチーズグレーターによく似ている。椅子に腰掛けたまま延々と続けており、不慣れな苦行をしているようであった。



写真1 ジャガイモを型抜きする

109. 恋のためらい～フランキー&ジョニー (原題: Frankie and Johnny)

1991年、アメリカ映画。監督:ゲイリー・マーシャル。

ジョニー (アル・パチーノ) は、刑務所から出てきたばかりだったが、怖い所として知られるニューヨークにあるカフェレストラン『アポロ・カフェ』のコックの職を得る。そこで、ジョニーはウェイトレスのフランキー (ミシェル・ファイファー) に一目惚れしてしまう。

しかし、ジョニーの想いにフランキーの態度は固い。男性関係で辛い経験のある彼女は、臆病になっていたのだ。彼女は美人であり、凛とした立ち振る舞いや仲間に見せる柔らかい表情もいい。そしてジョニーを受け入れたいが、また傷付くのが怖い。そんな悲しげで不安げな表情も見せてくれる。そして従業員の送別パーティーの夜、ふたりは一夜を共にするが、ジョニーの唐突なプロポーズにフランキーは怒り、家に閉じこもってしまう。

数日して、やっと店に出てきたフランキーにジョニーは、これまで詐欺偽造未遂で18か月の刑務所生活をしたこと、子供もいて、離婚歴ある過去と今の境遇や心境、そしてこれからの希望を話して聞かせる。ようやくフランキーも以前妊娠中に暴力を受けて流産し、その恐怖から逃れずにいることを明かす。彼女にかけたジョニーの言葉に徐々に心が温まっていく。

筆者お勧めの見所は、二人が初めてキスを交わす市場の花屋前のシーン。閉店真近の店で、ジョニーが白いジャガイモを器用に削ってから赤い液を使ってバラとしてプレゼントするところである (写真)。彼女

を口説くため、リクエストを受けないラジオ局に電話して、真剣に音楽をお願いしたため、DJが二人の愛を信じてピアノ曲を流してくれるシーンがある。その時都会の片隅で寄り添って生きる人達の温かさも映り、ニューヨークの町並みを美しく見せてくれる。都会派監督の叙情的で、渋い大人の恋愛心理描写、加えてミシェル・ファイファーの綺麗で魅力的、声の素敵さに惹かれる映画となっていた。



写真2 ジャガイモでバラをつくる

110. ファンギー家の奇想天外な秘密 (原題:The Family Fang)

2015年、アメリカ映画。監督:ジェイソン・ベイトマン。

本作品はケヴィン・ウィルソンが2011年に上梓した小説『ファンギー家の奇想天外な謎めいた生活』を原作としたコメディ映画である。

いつも趣味の悪いドッキリをして人々を驚かせる前衛芸術家を両親に持つ女優・アニー・ファンゲ (ニコール・キッドマン) の元に、弟で作家のバクスター (ジェイソン・ベイトマン) から電話がかかってきた。でかいジャガイモ砲 (写真3) で撃たれて怪我をしたから、病院に迎えに来てほしい

と言う。彼は手作りのポテト砲の取材を頼まれ、現地に行ったものの、一緒に遊びだしてしまったのだ。ジャガイモを発射するポテト砲を使ったウィリアム・テルばりの射的のマトに自ら志願し、バクスターの頭の上に缶を置いた度胸試しで、1度目は成功するも、2度目は顔面で捉えたのだった。横を向いたこともあり、鼓膜が破れた。病院に連れて行かれ、看護師から両親を呼んだことが知られる。



写真3 ジャガイモ砲

彼らの両親（ケイレブとカミーユ）は、アーティストを自称して、『人をアッと驚かせるパフォーマンス』をアートだと言ったり、大勢の前で銀行強盗を装うなどして、人を驚かせ続けてきていた。姉弟の高校時代の演劇『ロミオとジュリエット』でふたりがキスしなければならない羽目に仕組んだりするなど、変わった生活を子供の頃から強いられてきたため、両親の指導が理解

できず、大人になると距離を置いて暮らして生きていたのだった。それが、このバクスターの怪我により、久しぶりに一家が揃うことになる。

アニーも子供の頃から演技を強いられており、普通の家庭に憧れていた。家族の再会を機に絆を取り戻そうと考える姉弟だったが、保安官が家を訪ねてきて、ケイレブとカミーユが連続殺人事件に巻き込まれたと説明する。後に二人は両親の捜索を諦め、思い出の品々をフリーマーケットで処分することにする。両親が所有していたCDをBGMにかけていた二人はある曲を聞いて驚く。その曲は子供時代に自分たちが芸術活動の一環として歌わされた曲であり、一家しか知り得ない曲だったからである。二人はその曲を歌っている人の自宅に押しかける。家に行くと彼らの母とケイレブが来る。昔このふたりは、見せかけの夫婦を演じていた。しかしある時、事が起きて子供が生まれることになる。カミーユは彼を愛していることから、芸術が全てのために関係を続けていたことが判る。

バクスターは新作の『子供たちの穴』という本を発表する。それは姉と弟の物語であり、幸せになれると信じ、いつか穴から脱出するという話である。講聴会でバクスターは、涙を浮かべながら、聞きに来ている姉を見つめるのだった。